

# 英語入門期における単語発音の指導(上)

How to Teach the Pronunciation of English Words  
for the Beginners of Junior High Schools

寺島隆吉\*・小川勇夫\*\*

TERASIMA Takayosi, OGAWA Isao

## 目次

- 1 はじめに
- 2 「アブクドゥ読み」とは何か
- 3 日本式ローマ字を単語の発音指導にどう生かすか
- 4 英語における「文字と綴り字の乖離」をどう指導するか
- 5 合宿研究会レポート「入門期の発音指導」(小川勇夫)
  - 5 1 中学1年生という時期について
  - 5 2 当面の指導として何をしたか
  - 5 3 「分かる」は「分ける」から
    - 5 3 1 「ローマ字読み」できる音節を含む単語(別表1)
    - 5 3 2 アルファベットの「名前読み」できる文字を含む単語(別表2)
    - 5 3 3 「ローマ字読」も「名前読み」もできない音節・単語(別表3)
  - 5 4 実際に入門期で英語を教えていく指導の手順
    - 5 4 1 子音単独の音をローマ字指導・アルファベット指導を通じてきちんと教える
    - 5 4 2 日本式ローマ字からヘボン式ローマ字へ
    - 5 4 3 しかし問題は母音や「母音の合わせ文字」である。
  - 5 5 湧いてきた新たな興味
- 6 母音の「字名よみ」「名前よみ」と「分節法」が意味するもの
- 7 おわりに

参考文献

参考サイト

---

\* 岐阜大学教育学部

\*\* 和歌山県日高郡南部町立南部中学校

## 1 はじめに

私は1986年に岐阜大学へ赴任して、その年に英語教育応用記号論研究会(略称「記号研」,JAASET: Japan Association of Applied Semiotics for English Teaching)を設立して以来、現場教師と連携しながら英語教育に関する研究をおこなってきた。そして毎年、夏には合宿研究会を開き、他方では機関紙 Applied Semiotics および研究会のHP「掲示板」を通じて多様な交流と研究を積み重ねてきた。以下の小論は、そのような交流から生まれたささやかな研究であるが、入門期の英語教育に少しでも役立つのではないかと思い、研究協力者の小川氏とのやり取りをまとめてみたものである。

## 2 「アブクドゥ読み」とは何か

ことのきっかけは記号研HP「掲示板」(2004年5月2日)で、中学校の教師から入門期のアルファベット指導について下記のような投稿があったことである。以下にそれを再録する。

中学1年生の英語の導入にアルファベットを2時間やった後、やはりローマ字を教えている。へボン式を教えるだけでも大変な生徒が多い。今年の新しい試みは、アブクドゥ読みである。新英研の方法で覚えたが、それはアルファベットを短音の発音にそって練習するものである。

a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z  
 アブクドゥエフグ ハイジユクルムヌ オブクルストゥウヴウクスイーズ  
 (エイ) (イー) (オウ) (ア)  
 アブクドゥエフグ I am singing アブクドゥ

この新英研の方法をABCの歌に乗せて練習させる。ABCの歌テストの後、この替え歌を導入する。そして、1年生の導入段階であいさつ練習の次に単語練習が行われるが、その時、このアブクドゥ読みを練習してみた。

単語練習ではよく知っている単語の場合は単語の発音練習のあと、アブクドゥ読みに分解する。catの場合「ク ア ト」のように読ませ「キャット」を類推させる。次に、難しい単語の場合、逆にアブクドゥ読みから単語の発音を類推させることができる。fineの場合、「フ イ ヌ エ」「フィーネ」、すごいそれはドイツ語読みだね。他の読み方は? 「フ アイ ネ」、bikeで習ったように英語の最後のeは読まないことが多かったでしょう。「フ アイ ン」「フアイン」そうです。それが英語読みなんです。

このように私達が英語の発音を辞書を引かなくてもほぼ類推できるようになった過程をかなりはやく読めるようになると考えて実践しているところである。実践結果はまた報告します。(参考文献「英語の授業アイデアブック」三友社)

これに対して私は「掲示板」に次のようなコメントを載せた。というのは、確かに「アブクドゥ読み」が英語学習をゲーム化し、楽しみながら英語を学ぶという点で、非常に面白い試みだが、これではアルファベットの個々の名前と単語発音が何の関連もなく分離してしまい、結果として単なる暗記学習に出してしまう恐れがあると思ったからである。

「アブクドゥ読み」よりも、アルファベットの名前からどのようにして各音が出てくるのかを教えるのが大切ではないでしょうか。たとえば、「k(ケイ)」「[k(ク)]」です。

また、ローマ字を教えるとき「へボン式」ではなく「日本式」から入るべきだと思います。さもないと生徒の負担が重いだけでなく日本語の特徴を教えることが出来ません。「日本式」を知っていれば「へボン式」への移行は容易です。英語への応用はその次の課題です。しかも非常に応用価値・利用価値の高いものだと思います。

このようなコメント書いているうちに、新見先生の実践に刺激されて、これに関する本格的な論文を書いたくなりました。なるべく近いうちに機関紙で発表したいと思います。

私が上記のようなコメントを書いたのは、せっかく「ABCの歌」を憶えたのに、それと「アブクドゥ読み」の替え歌が何の関連もないのでは、歌を二つ暗記させられるだけに終わる可能性があると考えたからである。しかし、このような短いコメントでは、何を言っているのか読み手には全く伝わらないのではないかと、という意見が家人から出

て来た。そこで慌てて次のような補足コメントを翌日の「掲示板」に載せた。

先に「アブクド読み」の欠点について書きましたが、家人に読んでもらったら、「これだけでは何のことをいっているのか分からない」と言われてしまったので、若干の補足をします。

新英研の実践では、せっかく ABC ソングでアルファベットの名前を覚えたのに、それが英単語を読み発音するための知識として何の役にもたっていないので、それで「アブクド読み」というゲームを考え出したのですが、私は、そのこと自身が問題ではないかと思うのです。

というのは、せっかく「ABC の歌」を憶えたのに、それと「アブクドゥ読み」の替え歌が何の関連もないのでは、歌を二つ暗記させられるだけに終わる可能性があるからです。そうではなく、K「ケイ [kei] というアルファベット名から子音 [k] と母音 [ei] を分離することを教えてやれば、その子音の発音は、たとえば ki [kit] という単語の発音にそのまま生かすことが出来ます。

また、そのような「子音 + 母音」(ka-ki-ku-ke-ko) の組み合わせが日本語の特徴をなしていること、それに対して「子音 + 母音 + 子音」(たとえば kit など) が英語の単語の基本構造であることも教えてやる事が出来るわけです。

さらにまた、この原理でいけば、cat の場合「ク ア ト」のように読ませ「キャット」を類推させる。という問題が出てくることになります。というのは、C「スイ」というアルファベット名から「ク」という発音は直接に出てこないからです。むしろ出てくるのは cen-ter のような単語ではないでしょうか。ですから、cat という単語の読み方は、別の工夫や説明が必要になります。

このような説明をしていると、どんどん長くなるのですが、書いているうちに分かってきたので、諦めて「あとで論文のかたちで機関紙に載せます」と書いたのです。

このように少し長めの解説を書いたのだが、この程度の説明ではやはり納得が得られなかったようで、さっそく次のような返事が「掲示板」に寄せられた。というのは、上記のような説明だけでは「アルファベット名から子音 [k] と母音 [ei] を分離することを教えてやれば、ki [kit] という単語の発音にそのまま生かすことが出来ます」と言われても、それが具体的にどういうことを意味しているのか、納得できなかったのではないと思われるからである。

寺島先生、「アブクド読み」再論ありがとうございます。私なりにもう一度考えて見ました。

ローマ字の指導は「ヘボン式でなく日本語式から入るべきだ」という指摘はその通りだと思います。小学校で日本式はやっているから、中学校では「ヘボン式で」という考えで教えていました。ところがこのヘボン式の指導がやっかいで、読む方はまああてできるのですが、地名や人名を書かせると、多くの生徒が、ここで何度も間違えます。それに、まだ文字と音が一致しない生徒がクラスに何人かはいます。これらを、じっくり教えるには、日本式から入った方が抵抗は少ないと思います。

「アブクド読み」よりも、アルファベットの文字からどのように各音が出てくるのかを教えるのが大切」という指摘は、まだ納得できません。「エイ、ビー、スィー……」からの類推で音がわかるのはかなりありますが、e は「イー」よりも「エ」と読む場合の方が多い。g はジー (ジユ) よりも「グ」のほうが圧倒的に多い。そして 2 通り、もしくは 3 通りの読み方をする文字も多い。a (エイ、ア)、c (ス、ク)、i (ア イ、イ)、n (ン、ヌ)、o (オウ、オ、ア)、s (ス、ズ)、u (ユ、ウ、ア) など。その別の読み方を教えるためにも「アブクド読み」は役に立つのではないかと。そして、b が「ビー」から「ブ」の音で使われることを引き出すためにもアブクド読みが役立つのではないのでしょうか。

いま中学 1 年生の英語の導入段階で単語を教えていて、今までだったらフラッシュカードで単語の丸暗記をさせていた。それを「アブクド読み」で 1 文字ずつ分解して練習することによって、私も気づかなかった文字と音の法則を見つけることができた。

たとえば Becky という名前が出てくるが、「ブ エ ク ク イ」となり、「どうして『ク』が二つあるのだろう。」と質問すると、「詰まる音だ」と答えが返ってくる。同じように soccer も「ク ク」と重なる。これも「詰まる音」になっていることがわかる。

もうひとつ r を「ル」で教えているが、Mark の「ム ア ル ク」の「ル」が母音をのばす役目をしていることにも気づく。

最後の e がいつもサイレントであることも、単語を分解しているとすぐ気づくことでやっていて発見が多い

のに驚く。

こうやって文字と音の法則を探して指導していると、フォニックスになっていきそうだが、まずはアフクド段階での表をまとめて生徒にプリントして練習させようと思っている。

問題は今後 ,ee, ea, al, ou, au など母音の組み合わせを教えるときに ,あまりにも多くの法則が出てきて泥沼に陥りそうだが、まずは基本的な文字と音の関係だけでも理解させたいと思い実践している。

上記の反論は、私の説明に次のような欠点があったことを示している。

- 1) 単に「アルファベット名から子音[k]と母音[ei]を分離することを教えてやれば」と言われても、どう子音と母音を分離するのか、
- 2) また「子音+母音(ka-ki-ku-ke-ko)の組み合わせが日本語の特徴をなしていることを、ki[ kit ]という単語の発音にそのまま生かすことが出来ます」と言われても、それがどのように可能なのか。
- 3) 言い替えれば「子音+母音(ka-ki-ku-ke-ko)という『日本式ローマ字』の構造と「子音+母音+子音(たとえば kit など)が英語の単語の基本構造であること」を、どう関係させるのか。

これは、HP「掲示板」に字数制限があるので、なるべく簡潔に説明しようとした結果なのだが、しかし、このまま放置しておくわけにはいけないと思い、少し長くなったが、次のような回答を書いた。ただし「掲示板」の字数制限を考慮して2回に分割して載せた。

基本の母音(10個)



基本の子音(9個)



	ト A	ト YA	ト O(横)	ト YO(横)	ト O(縦)	ト YO(縦)	ト U(丸)	ト YU(丸)	ト U(横)	ト I
K(か行)	か	きゃ	こ	きよ	こ	きよ	く	きゆ	く	き
N(な行)	な	にゃ	の	によ	の	によ	ぬ	にゆ	ぬ	に
T(た行)	た	ていや	と	ていよ	と	ていよ	とう	てゆ	とう	てい
L(ら行)	ら	りゃ	ろ	りよ	ろ	りよ	る	りゆ	る	り
M(ま行)	ま	みゃ	も	みよ	も	みよ	む	みゆ	む	み
P(ば行)	ば	びゃ	ぼ	びよ	ぼ	びよ	ぶ	びゆ	ぶ	び
S(さ行)	さ	しゃ	そ	しよ	そ	しよ	す	しゆ	す	し
無(あ行)	あ	ゃ	お	よ	お	よ	う	ゆ	う	い
J(ちゃ行)	ち	ちゃ	ちよ	ちよ	ちよ	ちよ	ちゆ	ちゆ	ちゆ	ち

ハングル文字表(基本)

<http://dongta.lix.jp/han/han-6.html>

前回の説明では確かに納得いただけなかったかも知れません。しかし英単語の基本構造は,pen などを見れば分かるように, CVC (子音+母音+子音) ですから, まずこれを読めるようにすることが発音練習の出発点ではないでしょうか。

そこでせっかく覚えた日本式ローマ字を利用したらどうかと思うのです。さもないと, せっかくローマ字を覚えた意味がありません。また逆にローマ字が出来ると読める単語の世界が一気に広がります。例えば「パピペポ」が「pa-pi-pu-pe-po」と書ければ, pat-pit-put-pet-pot という単語が一気に読めるようになるわけです。

このように日本語の基本構造(50音)が CV (子音+母音) から出来ていることを先ず教えてやって, その子音と母音を分離することを教えてやらないと, いつまでたっても, pat を「pat-to」のように発音する習慣から抜け出せないことになります。

また, たとえば50音の「かきくけこ」が「ka-ki-ku-ke-ko」のように「子音+母音」で出来ているからこそ 韓国朝鮮語は, それを子音文字と+母音文字の組み合わせで表現する新しい表記形式を發明し, 漢字文化から脱却することが出来ました。しかし日本語では, 「k+a」は, 「か」という文字でしか表現できないので, 実は50音が CV という構造になっていることを自覚することを難しくしています。

さて上記の mark ですが, 「まみむめも」がローマ字で「ma-mi-mu-me-mo」と読み書できれば, mat「マット」, met「メット」と読むことは簡単ですし, mar を「マル」または「マー(ル)」と読むのは難しいとは思えません。あとはそれに「ク」を付け加えるだけですから, mark は「マルク」または「マー(ル)ク」となります。わざわざ「ムアルク」とする必要はありません。

同じことは Becky についても言えます。これは2音節語ですから, まず Beck-y と分けて発音することを生徒に教える必要があります。このように音節に分離した上で, Beck を「ベック」読ませることは, 合わせ文字 ck を「ク」と発音することを教えさえすれば, 「べ」をローマ字で「be」と読み書きできる生徒には, そんなに難しい作業だとは思えません。

ここまで来れば Becky を「ベック+イ」「ベッキイ」への飛躍は一足飛びで, わざわざ Becky を「ブ エク ク イ」とする必要はないように思います。ポイントは, Becky を Beck-y と分離できるかどうかということ, 合わせ文字 ck を教えることでしょう。これが出来れば Jack の発音も実に簡単に出来るようになります。このようにローマ字を土台に CVC の単語をたくさん読めるようにしておくことが次の飛躍を造り出します。

ですから soccer も, soc-cer と分節できれば「サッカー」と簡単に発音できるようになりますが, アルファベット「C」は呼び名の「スイ」を子音[s]+[i]と分離しても[k]という発音が出てこないで, 練習用単語としては高度なもので, 基礎練習の単語としてはふさわしくないわけです。アルファベット「C」を使った単語の練習をするのであれば, cent「セント」, center cen-ter「セン+ター」などから出発すべきではないでしょうか。

このように書いていくと, またどんどん長くなっていくので, 今回はここで止めます。なお「アブクド読み」はロー文字(ラテン語)の系列である下記のイタリア語の読みをほとんどそのまま使っているように思います。

<イタリア語>			
A	a	ア	[ア]
B	b	ビ	[ブ]
C	c	チ	[ク][チ]
D	d	ディ	[ドゥ]
E	e	エ	[エ]
F	f	エッフエ	[フ]
G	g	ジ	[グ][ジ]
H	h	アッカ	[無音]
I	i	イ	[イ]
(J	j	イルンゴ)	
(K	k	カッパ)	
L	l	エッレ	[ル]
M	m	エンメ	[ム]
N	n	エンネ	[ヌ]
O	o	オ	[オ]
P	p	ピ	[プ]
Q	q	ク	[ク]
R	r	エッレ	[ル]
S	s	エッセ	[ス][ズ]
T	t	ティ	[トゥ]
U	u	ウ	[ウ]
V	v	ヴウ, ヴィ	[ヴ]
(W	w	ドッピオヴウ)	
(X	x	イクス)	

出典 ローマ字の基礎 <http://www.halcat.com/roomazi/rmzkiso.html>

イタリア語・スペイン語の基本型はCVで日本語と同じですから、イタリア語やスペイン語の単語を読む方が英単語を読むよりもはるかに易しいと言えます。しかし英語が読めるようになるためには、既に述べたように、英単語の基本構造である「CVC」に飛躍しなければならないのです。とはいえ、拙著『英語にとって音声とは何か』でも書いておいたように、英語でも多音節語はローマ字読みに戻りますから、多音節語の発音の方が本当は易しいのです。『英語にとって音声とは何か』第3部を読み直していただければ幸いです。

### 3 日本式ローマ字を単語の発音指導にどう生かすか

さて「掲示板」で上記のようなやり取りをしていると、「中学一年生に教えていて思うこと：寺島先生の『アブクド読み再考』をよんで」と題して和歌山県の中学校で英語教師をしている小川勇夫氏から下記のような投稿があった。

今年は一年生担任ということもあって、一年生を教えています。そこで難しいなと思うことは、やはり英語の発音とスペルの関係です。S先生もそうしたことから「アブクド読み」を試されていると思います。

さて、僕の場合は、ローマ字の学習とアルファベットの発音と文字の習得から始めます。アルファベットは大文字、小文字とも小テストを行って、それぞれ「3文字までの間違いなら合格」として約100名の生徒が、アルファベットを書けるようになりました。それでも、非常に低学力の生徒がいるので、もうその生徒は忘れていると思いますが。

そのあと、教科書に入っていくわけですが、指導は授業中に単語を発音できるようにしてやり、あとは単語ノートに何度も書かせるという方法をとっています。単語の発音とスペルをできる限り初期からインプットし、そこから発音とスペルをマスターさせるというものです。

教科書の『ニューホライズン』の「ユニット1」に出てくる「覚えたい語句」は次の通りです。

good morning I am (p 12)

are you Ms. Mr. yes nice to meet too (p 13)

from America no not Canada (p 14)

excuse me your change oh my thank welcome (p 15)

この中でアルファベットの名前読みの中に（そしてローマ字の中にも）発音のヒントが隠されている単語は次のとおりです。

good: g はアルファベットの名前読みの中に、そしてローマ字の中にもある音素, d も同様, oo は「ウ」と教えるしかない。実際はコメントしていない。

morning: mo はローマ字読み, r は発音しないとする, ni はローマ字読み。

I: アルファベットの名前読み

am: a はローマ字読み, m はアルファベットの名前読みの中に、そしてローマ字の中にもある音素

こうしてみてもアルファベットの名前読みの中に、そしてローマ字の中にもないものは以下の単語で下線部の部分。

you: ou で「ウー」, y はローマ字読みの中に音素として含まれている

are: re は発音しない

to: o は「ウ」

meet: ee は「イー」

America Canada excuse: c は[k], s は[z]

your: our は「ウア」

change: ch は「チイ」

thank: 「サ」に近い音

welcome: o は「ア」

こうしてみると、アルファベットの名前読みの中、そしてローマ字の中の音素として何となく認識できても、それ以外にもこれだけの文字とスペルの特別な関係が含まれている。また、これを事細かに説明することは、中学一年生には複雑だし、退屈でもある。ただし簡単に触れてやることは可能であろう。

こうしたことを、とりあえず生徒に何度も書かせることによって、音とスペルの関係を大量にインプットしていこうというのが当面の僕の方法です。先生の投稿を読んで今自分の足りない点を自覚して良い機会となりました。いろいろご意見ありましたら教えて下さい。

上記の投稿を読んで、まだ小川氏にも私の意図が十分に伝わっていないことが感じられた。というのは、彼は末尾で「こうしてみると、アルファベットの名前読みの中、そしてローマ字の中の音素として何となく認識できても、それ以外にもこれだけの文字とスペルの特別な関係が含まれている。また、これを事細かに説明することは、中学一年生には複雑だし、退屈でもある。ただし簡単に触れてやることは可能であろう。」と書いているからである。

小川氏は「ただし簡単に触れてやることは可能であろう」と書いているが、私の意図は「アルファベットの名前から子音と母音を分離し、それを日本式ローマ字の一覧表に載せるだけで多くの単語が読めるようになること」を教えることであった。また、他方で「易しいと言われている中学1年生の単語ほど、この方式で読めずに丸暗記しなければならないものが如何に多いか」を教師自身が自覚する切っ掛けにもなるのではないかと思ったのであった。そこで私は次のような返事を「掲示板」に載せた。

小川先生は上記で「アルファベットの名前読みの中に、そしてローマ字の中にもないものは以下の単語で下線部の部分」として「you, are, to, meet, America, Canada, excuse, your, our, change, thank, welcome」をあげています。

こうしてみると、to, you, your, are, our, come, good など、日常的によく使う一音節の単語ほどローマ字読みに従わないことが分かります。

だから最初は英文に仮名ふりをして、とにかくリズム読みをしながら英語音声を楽しむことが大切なのです。そして語彙が一定量に達したときに「ローマ字読みをすれば如何にたくさんの量の単語が読めるか」を実践的に教えてやれば良いのではないのでしょうか。

その際、母音の合わせ文字「ou」「oo」などは「you, your, our」「good」を見れば分かるように、非常に難しいものですから、低学力の生徒のために、最後まで仮名ふりは残るかも知れません。しかし子音の合わせ文字「ch」「ck」「th」などはローマ字読みの時に一緒に教えれば、習得はそんなに難しくはないと考えます。

さ sa (tha)	し si (thi, ci)	す su (thu)	せ se (the, ce)	そ so (tho)
sand,	sink,	sute マガモの群れ	send,	soft,
thank	think		theft 窃盗	thong 革ひも
	ci-gar, ci-ne-ma		cent, cen-ter	
		su-per, Su-zanne	se-man-tics	so-lu-tion so-ci-ol-o-gy
		thu-li-a 酸化ツリウム	the-ra-py (ther-a-py)	

上記の表を見ていただければ、多音節語ほどローマ字読みで簡単に単語が読めることを確認できるはずです。先に「拙著『英語にとって音声とは何か』第3部を読み直していただければ幸いです。」と書いておいた理由がここにあります。同じことを「か行」で示すと次のようになります。

か ka (cka, ca)	き ki (cki)	く ku (cku, cu)	け ke (cke)	こ ko (co, cko)
ka-bob 串焼き	kit	KungChiu 孔子	Kent (人名)	Ko-dak コダックカメラ
yack-a つらい仕事	Vick-i (Victoriaの別称)	Ba-ku バクー(都市名)	rock-et	beck-on 手招きする
ka-lei-do-scope	ki-ne-sics 動作学	doc-u-men-ta-ry	Ken-tuck-y	Me-kong メコン川
can		cube, cute, ac-cuse		cop 警官, com-mon

ここでも「多音節語ほどローマ字読みで簡単に単語が読める」ことを確認できるはずです。つまり、『英語にとって音声とは何か』第3部で書いておいたように、一見すると難しい単語ほど発音するのが易しいのです。いずれにしても、中学校の教科書に出てくる単語を使って、このような表を学年ごとに作ってみると、どれくらいローマ字読みで単語が読めるようになるかが確認できるはず。ぜひ試してみてくださいと思います。

ところで、上記の小川報告では「アルファベットの名前読みの中に、そしてローマ字の中にもないものは以下の単語で下線部の部分」として「you, are, to, meet, America, Canada, your, our, change, thank, welcome」があげられていたのですが、次のように考えれば、十分に読めるようになるのではないのでしょうか。

1) meet の「ee」は「イー」が二つ並んでいるので、「イー」と伸ばす。もともとラテン語では母音字を二つ重ねるのは長く伸ばす印だったので。

2) A-mer-i-ca, Can-a-da は、上の表のように「か」が「ka」だけでなく、「ca」という場合があることも教えておけば、これらもローマ字読みそのものではないでしょうか。

3) excuse は ex-cuse と分節すれば、「ex」を「エ(e)クス(x)」と読ませることは余り難しいとは思われませんし、cuseの方は、末尾の「e」は直前の母音字を「アルファベットの名前読み」=「字名よみ」させる記号ですから、cuse は当然ながら「クユース」「キユース」と発音されることになります。

「キユース」を「キユーズ」と発音させるためには、「s」は「ス」「ズ」の二通りの発音があることを教えておかなければならないのですが、これそのものは「無声音」「有声音」の転換だけです。発音自体に難しさがあるとは思えません。

4) change ですが、「ちゃ」のローマ字を教えるときに、日本式「tya」と同時に、ヘボン式「cha」も教えておけば、この単語を「チェインジ」と発音させることは何の困難もないように思えます。あるいは、拗音だけはヘボン式で教えておくという方法もあります。

というのは、末尾の「e」は「字名よみ」の記号ですから、その直前の母音字「a」は「エイ」となるから。つまり「cha」は「チャ」ではなく「チェイ」となりますし、「n」は「ン」、「g」は「ジ(イ)」ですから、これらを合わせれば、「チェイ+ン+ジ」となります。

5) 最後に welcome ですが、「わ wa」「うい wi」「うえ we」「うお wo」というローマ字が教えられていれば、wel を「ウェル」と読ませるのは難しくないはず。

問題は come ですが、これは末尾の「e」を考慮に入れると、「ク k+オウ o+ム m(e)」 「コム」となるはずですが、既に述べたように、身近な易しい単語ほど規則に従わないので、これは例外であり、「カム」と発音するのだと教える以外に仕方がないように思われます。

これは動詞の過去形でも同じで、身近な単語ほど不規則動詞になり、come-came; go-went などのように、原形語尾に「-ed」を付けるだけでは過去形になりません。つまり先にも述べたとおり、易しい単語ほど難しく、難しい単語は逆に易しいとも言えるわけです。

そこをお願いします。上記のようなローマ字50音の表を作り、中学校の教科書に出てくる単語でローマ字よみ出来るものをこの表に埋めていくと、どのようなものが出来るか、ぜひ試してみてください。それを学年ごとに作ってみると、どれくらいローマ字読みで単語が読めるようになるかが確認できるはず。それを夏の研究集会で発表していただければ参加者も大いに得るものがあるのではないのでしょうか。

上記のような解説と提案をしたところ、小川氏から下記のような返事が寄せられた。氏は私の提案を、「教師でさえ、発音とスペルのルール性をきちんと体系的に自覚できていないのですから、発音とスペルのルール性を体系的にまとめておくことは、生徒に教える上で必須のことだと今にして思います。とても有意義な示唆を与えて頂きありがとうございます。」というように非常に好意的に受け止めてくれた。

寺島先生、丁寧に答えて頂きありがとうございます。ちょうど中間テスト作成の時期と重なったりと、返事が遅れてすみませんでした。

中学一年生に英語の発音を分かりやすく教えようと思えば、なかなかおもしろい発見があって興味深いです。今、すべての生徒が英語のスペルを見て発音できるようにと工夫しているところです。

最初はアルファベットの発音と大文字、小文字を教えました。次に、ローマ字を教えました。それは、アルファベットの「名前読み」に含まれる音素と「ローマ字読み」で、多くの英単語の発音のヒントが得られるか



らです。

ところで、「ニューホライズン」の教科書では、ローマ字はヘボン式です。と言うわけで生徒にはヘボン式のローマ字を教えました。これが結構たいへんです。(それはさておいて)

授業で、英単語の発音を教えるときには、まずローマ字で読める単語を教えました。例えば、pen, piano。少し難しくなって tennis, flute。ここで「ローマ字読みで発音できたら英語は簡単なんだけど」と生徒に言いながら、「残念ながら気をつけなくてはいけないのがあるんだよ」と更に難しくなって cat, America, Canada。これら3語はCをカキケケコ[k]と説明しながら発音を教えました。good は oo をウと発音するとカタカナをふってやると読めます。

他には例えば meet。これなんかはやっぱ ee はイーとカナを振りながら教えました。この時 e の名前の発音が生きてきます。change はヘボン式の chi が利用できます。you なんかは ou をウと発音するとカナをふりますが、o を抜いて yu で you の発音というのも無理があるので生徒も予測しにくいと思います。

こんなふうに、1年生の教科書をこうした観点で生徒に教えていきたいと思います。そして先生の提案された教科書の単語をア行、カ行とスペルとの関連付けながらまとめるのはとても有意義なことだと思います。夏の記号研の集会までには、1年生の教科書の単語を、そんなふうにまとめられたと思います。

子どもの身体的・知的発達も様々ですし、英語を習うのはじめての子もいるので、1年生が一番大変ですし、しかも1年生で一番、日常語が出てきて、ここさえ乗り切れば、語彙が蓄積され、生徒も自覚せずとも英語の発音が類推できるようになってくるからです(教師でさえ、発音とスペルのルール性をきちんと体系的に自覚できていないのですから)。

ですから、発音とスペルのルール性を体系的にまとめておくことは、生徒に教える上で必須のことだと今にして思います。とても有意義な示唆を与えて頂きありがとうございました。

「生徒のわからなさには理由がある」というのは寺島先生に教えて頂いたことですが、その「わからなさ」を解きほぐすことは物事の本質に突き当たることです。一年生に分かってもらうよう努力したいと思います。

以上のやり取りを踏まえて、いよいよ夏の合宿研究会を迎えることになるわけだが、中学1年生の単語をローマ字一覧表で整理してもらうにあたって、念のため確認しておきたいことがあったので、再度、次のようなコメントを氏に送った。というのは、この一覧表をつくる際に、ぜひ拙著『英語にとって音声とは何か』を再読しておいて欲しいと思ったからである。

以下の引用について、簡単に思いついたことをコメントさせていただきます。まず、頂いたメールの下記の部分です。

ところで、「ニューホライズン」の教科書では、ローマ字はヘボン式です。と言うわけで生徒にはヘボン式のローマ字を教えました。これが結構たいへんです。こんなふうに、1年生の教科書をこうした観点で生徒に教えていきたいと思います。そして先生の提案された教科書の単語をア行、カ行とスペルとの関連付けながらまとめるのはとても有意義なことだと思います。夏の記号研の集会までには、1年生の教科書の単語を、そんなふうにまとめられたと思います。

日本語のアルファベットは非常に合理的に出来ています。それは50音図を日本式ローマ字で書いてみれば直ぐ分かるはずですが、しかし、ところどころ文字と英語発音が一致していないところがあるわけですが、それを気づかせるのにヘボン式は役立ちます。(この点については拙著『英語にとって音声とは何か』第3部第3章を読んでください。)

ですから最初は日本式でローマ字を導入し、必要なところでヘボン式で補えば生徒に納得してもらいながら無理なくローマ字を覚えてもらえるのではないのでしょうか。ついでにハングル文字(朝鮮語)の仕組みを教えれば、いかにハングルの仕組みが日本語と似ているか、しかもハングルのアルファベットがいかに巧妙に作られているかを理解させることができ、言葉の面白さも同時に教えることが出来るのではないのでしょうか。

(実はアメリカ先住民の中でも唯一、文字言語をもっていたチェロキー族のアルファベットも日本語の50音図と非常に似ています。彼らの先祖はアジアからベーリング海峡を渡ってアメリカ大陸に移住したので、言語構造が似ているのかも知れません。)

夏の研究集会では、上記のような観点に立って、日本式ローマ字で、教科書の中に出てくるものでどれだけ

の単語が読めるようになるのか、それにヘボン式を付け加えると、さらにどれだけ読めるようになるのかを、1年生だけでなく2先生・3年生の教科書でも実験してみたいのです。

もちろん、その際、小川さんも指摘しているように、「cをカキクケコ[k]と説明しながら」発音を教えることも含んでいます。ただし[ca-ci-cu-ce-co]は「か・き・く・け・こ」とならず、「か・シ・く・セ・こ」となることにも注意しなければなりません。(たたし一挙に全てを教えようとするとう問題が出てきます。そうではなく、単語が一定程度、蓄積してきたら、その都度この50音図で整理して見せることが大切なのです。)

第2に、メールの次の部分が気になりました。というのは、母音の重ね文字については以前に送ったメールで既に言及してあったからです(また「掲示板」にも載せておきました)。

good は oo をうと発音するとカタカナをふってやると読めます。他には例えば meet。これなんかはやっばり ee はイーとカナを振りながら教えました。この時 e の名前の発音が生きてきます。you なんかは ou をうと発音するとカナをふりますが、o を抜いて yu で you の発音というのも無理があるので生徒も予測しにくいと思います。change はヘボン式の chi が利用できます。

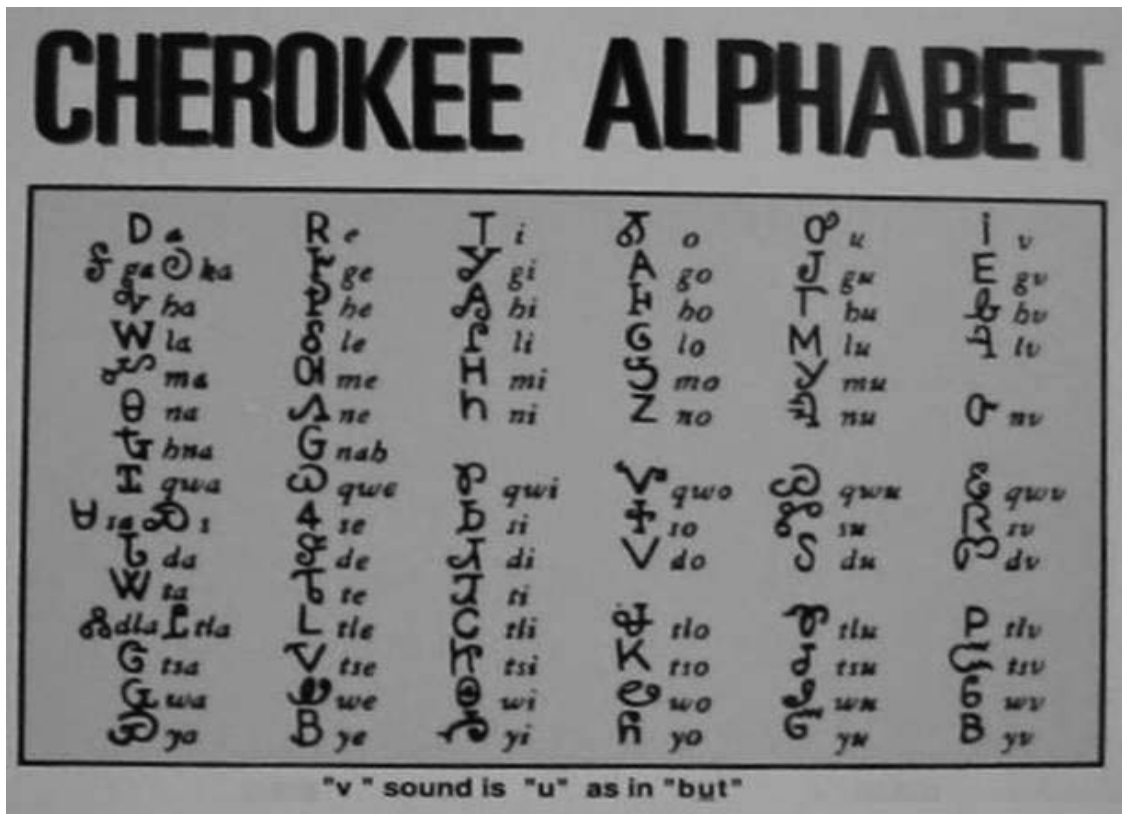
以前にも「掲示板」で書いたように、meet の「ee」は「イー」が二つ並んでいるので、「イー」と伸ばす。また末尾の「e」はその直前の母音を「アルファベットの名前読み」にする記号だと考えれば、「ee」は当然ながら「イー」と読むことになります。

もともと母音を二つ重ねるのは「長音」の印でした。ですから good は元々は「ゴード」でしたし、meet も元々は「メート」だったわけです。それがいわゆる「大母音推移」で徐々に変化して現在の発音になっています。このあたりのことも拙著『英語にとって音声とは何か』の第2章「合わせ文字の発音指導」でふれておきましたので参照していただくと幸いです。

また、change の発音については、先にも述べたように「た・ち・つ・て・と」「ta-ti-tu-te-to」で読める単語を教えた後で導入すると、理解がいつそう深まると思います。その際、先にも述べたように、ところどころ文字と英語発音が一致していないところがあるわけですが、そのときこそヘボン式を教える好機なわけです。

さらにまた、それを気づかせることが同時に言葉の面白さを教えることでもあるのです。たとえば「さ・し・

チェロキー文字 <http://hijita.hp.infoseek.co.jp/cherokee.htm>



す・せ・そ」が実は日本語では [ sa-si-su-se-so ] [ sha-shi-shu-she-sho ] の二段が組み合わせられていること、「た・ち・つ・て・と」では更に三段の組み合わせで出来ていることなどが分かるはずです。このことも、拙著『英語にとって音声とは何か』第3部第3章「英語子音の発音指導」で詳しく展開しておきましたので、もう一度、読んでいただくと、一覧表を作るときに便利かと思えます。

#### 4 英語における「文字と綴り字の乖離」をどう指導するか

さて以上の提案をしたところ、小川氏から「ローマ字表と単語スペル」(次頁別表)のような資料が送られてきた。この表を見て、今までの「掲示板」やメールのやり取りを通じて、自分の意図していることが相手に理解してもらっていると思っていたことが、全く間違いだったことを知った。というのは、小川氏は次頁別表のような表を作ってくれたのは良いが、ほとんどの単語を「あ・い・う・え・お」などの母音行に入れ、肝心の「か・き・く・け・こ」などの子音行に入っている単語がほとんどないからである。

しかも、このような表では、日本語音の基本構造 CV「子音+母音」でローマ字表を作りながら、それを使って英語音の基本構造 CVC「子音+母音+子音」を明らかにすることは出来ない。そこで早速、別表の単語を入れ直してくれるよう依頼した。たとえば上記の母音表に含まれている単語(1音節語)を私の指示に従ってに入れ替えただけでも次のような表ができる。

ローマ字表と単語スペル

	あ a	い I, y	う u	え e	お o
	a, are, am, an, at, and ( all )	is, it		( each, earth )	
か k, c	( call )				( come, cook )
が g				get ( green )	got, lot, not ( good )
さ s, c					
ざ z, j			( just )		
た t					
だ d		did		desk ( dear )	door ( do, does )
な n					( noon )
は h, f	happy ( hall )	him, his, fifth ( first )	hard, flute	head ( he; her, hers, here; free )	for, fourfrom
ば b	( ball )	( bird )	( bus, but )	( be, beach )	( book )
ぱ p					
ま m			( much )	( me; meet )	( month )
や y					
ら r, l			large ( lunch )	( leave )	( love, look )
わ w					
ん N					

上記の表で括弧に入れてあるのは、「ローマ字読み」では単語発音ができないものである。例えば, all, call, hallなどは、そのまま「ローマ字読み」すると、各々「アール」「カール」「ハール」などになるはずであるが、実際は「オール」「コール」「ホール」のようになる。同じような例を以下に列挙する。

ローマ字表と単語スペル(別表)

あ a (er u ir o ear ur ar or)	い i (e ea u ee y a)	う u (oo o)	え e (a ea)	お o (a au or oo)
a about after afternoon am America an and animal answer at around ----- dinner her hers hamburger ----- August bus but lunch hundred husband just much num ----- bird birthday first ----- brother come country does love favorite Monday month mother ----- early earth ----- hard large are ----- homework junior	did fifth him his interesting is it in be he me English here evening beach each easy before between dear defferent busy December fifteen free green leave meet fifty happy language minute	flute book cook good look cartoon kangaroo noon do move	enjoy desk get every excuse any many breakfast head	from got lot all also hall August Australia ball call border four morning door not
か ka(c)	き	く ku (ck c)	け ke	こ ko(c)
can Canada cap car card cartoon cat country cricket cross		back class close cloudy club excuse		coin cola
さ	し si(c)	す(th c)	せ	そ
	cereal city December	birthday math nice		
た	ち ti(chi)	つ tu(ts)	て	と
	child choose March	its		
な				
は ha	hi	hu(f)	へ he	ho
had have has		family	hello help	hospital hot
ま ma	み mi	む mu	め	も
man mist			member milk	
や	い	ゆ yu (eau u ew)	え	よ
		beautiful computer music new		
ら	り	る	れ	ろ ro(lo)
	let's			long
わ				
ん				

- 1) do, does: そのまま「ローマ字読み」すると、「ド」「ドエス」だが、「ドウ」「ダズ」でなくてはならない。
- 2) bus, but, much: そのまま「ローマ字読み」すると、各々「ブス」「ブット」「ムッチ」などになるはずであるが、実際は「バス」「バット」「マッチ」のようになる。
- 3) be, he, me: この「ローマ字読み」では「ベ」「ヘ」「メ」であるが、実際の発音は「ビー」「ヒー」「ミー」である。しかし、これらの語尾に子音が付き, bet, hem, met のようになれば、簡単に「ベット」「ヘム」「メット」と読める。
- 4) door, cook, noon: ローマ字表で「ド」は do だから、その類推で door を「ドー(ル)」と読めるかも知れないが、cook, noon は「コーク」「ノーン」とは読めない。cook, door, noon の下線部の発音が全て異なるから生徒は大いに戸惑うことになる。
- 5) dear, head, beach: 「ローマ字読み」からの連想で「デア」「ヘッド」「ベアチ」とは読めるかも知れないが、「ディア」「ヘッド」「ビーチ」とは読めない。なぜなら, head, dear, beach の下線部の発音が全て異なるからである。

このように考えると、中学校1年の教科書は意外と難しいことが分かる。しかも日常的に使う1音節の単語が、このように、ある意味で、丸暗記しなければならない単語に満ちているのである。

ところが私たち教師は、英語が好きで暗記が得意だったひとが多いので、これらの単語を簡単に(かつ)無意識に読めてしまい、その難しさを知らない(その難しさに気づかない)のである。

したがって入門期の英語を教える教師は、英語発音の基本構造「子音+母音+子音」を持ち、かつ「ローマ字読み」できる単語から読み方を教えなければならない。それ以外の単語は、当面はカタカナを振って済ますのが一番よいのである。

さもないと、ものごとを分析的・理論的に考えることの出来る生徒ほど、英単語が読めなくなる。これが、今イギリスで大きな問題になっている DYSLEXIA (ディスレクシア: 読み書き不能症候群) の最大の原因である、と私は考えている。この DYSLEXIA と「文字と綴り字の乖離」の問題については別に機会を改めて詳論するつもりである。

それはともかく、英語1音節の基本単語「子音+母音+子音」が読めるようになれば、多音節語は簡単に読めるようになる。というのは、多音節語は英語音の基本構造「子音+母音+子音」同士の組み合わせ、あるいは日本語音の基本構造「子音+母音」と英語音の基本構造「子音+母音+子音」から出来ているに過ぎないからである。

たとえば2音節語は次のようになっている。例を上述の小川氏の母音表から取って下記に示す。

after: aft + er = 「(子音+) 母音+子音」 + 「(子音+) 母音+子音」  
 answer: an + swer = 「(子音+) 母音+子音」 + 「子音+母音+子音」  
 dinner: din + ner = 「子音+母音+子音」 + 「子音+母音+子音」  
 husband: hus + band = 「子音+母音+子音」 + 「子音+母音+子音」  
 happy: hap + py = 「子音+母音+子音」 + 「子音+母音」  
 before: be + fore = 「子音+母音」 + 「子音+母音+子音」  
 also: al + so = 「(子音)+母音+子音」 + 「子音+母音」

ところが、小川氏は dinner, husband のみならず, her, hers までも、母音行の「あ欄」に入れているのである。これは [er] という綴り字を「ア音」に分類したかったからであろうが、まず生徒にとって問題なのは、英語音の基本構造「(子音+) 母音+子音」なのだから、教師が指導すべきなのは、単語 hen, help はローマ字式に「ヘン」「ヘルプ」と発音されるのに対して、her, hers は例外的に「ハー」「ハーズ」と発音され、「ヘル」「ヘルス」ではないということなのである。

したがって her, hers は「八行」+「e列」の欄に、例外的の印として括弧付きで書き込まなければならないことになる。これは先に箇条書きで紹介した be, he, me についても同じである。それぞれ「バ行」「八行」「マ行」+「e列」に、やはり括弧付きで書き込まれることになる。このようにしてできたのが先ほどの私の<表>だったのである。

小川氏は同じ考えで、dinner, husband の下線部に着目して、これらの単語を「母音行」「a列」に入れているのだが、これも生徒に発音を教える手順としては間違いである。dinner は din + ner と分節されるのだから、まず [din] の欄、すなわち「ダ行」「i列」に入れて、「ディン」と発音できることを教えなければならない。それさえできれば、din + ner 「ディン」+「ナー」「ディナー」と発音させることは、それほど難しいことではない。

同じことは husband にも言える。小川氏は, bus, but, much など「母音行」「a 列」に入れているのだが, ここで生徒に必要なのは, [u] という母音字を「ア音」として丸暗記させることではなく, 「子音 + 母音 + 子音」のローマ字的読み方の例外として教えることである。なぜなら, fulfill, beautiful, music, computer のように, 多音節語になれば, [u] を「ウ」または「ユー」と発音することの方が多くなるからである。また単音節語でも, flute の [u] は, 「ウー」と発音する。

だとすると, husband も「母音行」「a 列」入れるのではなく, 「八行」「u 列」に入れておくべきなのである。そして, husband hus + band と分節しながら, bus, but, much などと併せて教えれば, その発音の習得は決して難しいものではない。また, その方が他の単語の発音に対しても応用力が効くことになる。したがって, このような観点で小川氏の <別表 1> を見直すと, 全面的に作り直さなければならないことになる。

そこで, 以上のことを小川氏に伝え, 改めて「ローマ字表と単語発音」の表をつくりなおすように要請した。ただし, この表を作る際に, もう一つだけ注意しておいて欲しいことがあった。それは, 上記で「husband hus + band と分節しながら, bus, but, much などと併せて教えれば, その発音の習得は決して難しいものではない」と書いたが, band を「バンド」と発音できるためには, 下記のような分析ができていなければならないということである。

band = [ b ] + [ a ] + [ nd ]    英語単音の構造「子音 + 母音 + 子音」  
 = [ b + a ] + [ nd ]    日本語単音の構造「子音 + 母音」 + 子音  
 = [ ba ] + [ nd ]    「ローマ字読み」 + 子音    「バンド」

また, 生徒が, このような分析ができるためには, band という単語を構成している各文字のアルファベット名「b ビー」「a エイ」「n エヌ」「d デー」から, その文字を発音する際の各音素を抽出できなければならない。その一番簡単な方法は, 各文字の名前から母音を引き算する方法である。たとえば [ b ] [ n ] [ d ] については, 次のようになる。

b 「ビー」    「ビー」から母音「イー」を引く    「ブ [ b ]」  
 n 「エヌ」    「エヌ」から母音「エ」を引く    「ヌ」「ン [ n ]」  
 d 「デー」    「デー」から「イー」を引く    「ドウ [ d ]」

他方, 母音字 [ a, i, u, e, o ] に関しては, その文字名から何かの母音を引き算しても, それぞれの各発音「ア, イ, ウ, エ, オ」が出てくるというわけではないので, これはローマ字を憶えるときに暗記してもらいより仕方がない。とはいつても, たった 5 文字なので, その発音を憶えるのに非常な負担であるとは思えない。

このようなことを考えると, イタリア語などラテン系の言語はアルファベット名と文字の発音が乖離していないから学習に便利であるし, その点で日本語ほど楽な言語はないとも言えよう。というのは, 「秋」という漢字に「あき」という振り仮名がついている場合, それをそのまま「あき」と読みさえすれば, それが「秋」という単語の正しい発音になるからである。

それはともかく, 以上の指導法は, 発音記号を使った指導から見れば粗雑な方法かも知れないが, 大まかな単語発音を得るのに最も簡単な方法である。というのは, 仮名ふりした単語を「リズムよみ」ただけで, 十分に英語らしい発音が生まれることは, これまでの実践で証明済みだからである。(これについては, 拙著『英語音声への挑戦』全 6 巻などに詳しいので, ここでは詳述しない。)

また, たとえ発音記号を使った指導をしたとしても, それによって正しい発音を得られる保証はない。それどころか, 生徒にとっては, アルファベットの名前, 大文字・小文字の書き方(さらには教師によっては筆記体の大文字・小文字の書き方までも)憶えさせられるのだから, これ以上, 発音記号にまでエネルギーを割くゆとりがない。

更に言えば, 発音記号を使って, 単音から発音指導した結果, 多くの英語嫌いを産み出してきたことも, これまでの日本の英語教育史が示しているとおりでである。私自身も, この母音や子音の発音訓練や聞き分け訓練のため, 多くの時間を費やしたにもかかわらず, 単に英語と自分の能力に対する絶望感を深めただけであった。しかし, その絶望感から私を救ってくれたのが「リズムよみ」だった。

さて, 以上のことを念頭において小川氏に「ローマ字表と単語発音」の表の再検討をお願いしたわけだが, 夏の合宿研究会で発表されたのが, 次のレポートと <別表 a b> だった。それを以下に再録する。ただし, 読んでいて後でコメントを付けたくなくなったところに下線を引いておいた。

## 5 合宿研究会レポート「入門期の発音指導」(小川勇夫)

## 5 1 中学1年生という時期について

今年、1年生担任ということで、英語は1学年3クラスを受け持っている。1年生を教えることはあまり好きではないという思いを持っていた。

理由は、2・3年生では記号研方式による「リズム読み」「フレーズ読み」「記号付け」で学力をつける方法に手応えを感じていたが、1年生の当初の指導方法に明確な方針を持ちきれていなかったためである。

特に、英語のスペルと発音をどう一致させていくかという点については、自分自身のなかでもはっきりと整理されていない状態であった。英語史的に見て、英語はスペルと発音の乖離が特徴であるという漠然とした知識を持っていた程度である。

通常、中学1年生では、最初にローマ字やアルファベットを教えるが、寺島先生の言われるように、それが1年生の英単語の発音指導に有効につながっていないという漠然とした気持ちもあった。

## 5 2 当面の指導として何をしたか

そうしたなかで、今年、2年ぶりに1年生を受け持ったわけだが、定石どおりに、はじめにローマ字を教えた。教科書ではヘボン式がのっており、ペンマンシップ(副教材)もヘボン式を採用しているためヘボン式を教えた。(英語を教える上での日本式ローマ字とヘボン式ローマ字の比較は後で論じる)

次に、アルファベットの文字と名前の発音とを教えた。文字については大文字から小文字ができた過程を教えながら説明したりした。アルファベットは大文字が先に作られ、小文字が大文字から形を変えてできたこと、その過程を予想させながら説明すると覚えるのも速く生徒も興味をもって授業に参加できたようであった。

この時に、アルファベットの発音も教えるわけだが、まずその発音はアルファベットの名前であるということを説明する。文字に名前があるというのは日本人にはどうも理解しがたいことなので、文字に名前があるということを強調する。

その際の発音指導は、子音の発音の仕方、例えばMの発音は[emu]にならないように[m]の発音は両唇を離さない、L, Nは[el] [en] [l] [n]は舌先を上歯の裏側から離さないなど、英語の子音の発音などに注意しながら教えた。

D, Tも舌先を上歯の裏側につけてから発音すること、Cは「シー」にならないこと、Fの[ef], Vの[vi:]の[f] [v]は下唇を上歯で軽く押さえること、Rの[r]は絵を描きながら舌をまるめることも留意して教えた。WはUが二つなまってできたことからその名前の由来も説明した。そうした説明のあと、さらにアルファベットの歌で、発音と順番を覚えさせた。

このように、ローマ字指導とアルファベットの指導だけで相当の時間数を費やした。

しかしそれでもこれらの指導が、英語の発音指導に有機的に十分につながっていないというのは、寺島先生の指摘のとおりである。その理由は、自分自身の中で、ローマ字やアルファベットの名前の発音の中に英語の音素が多数含まれているのは分かっているが、それが体系として自分自身の中で整理されていないためであった。

勿論、授業ではローマ字やアルファベットの発音を利用しながら発音とスペルの関係を教えた。以前、記号研の掲示板に以下のように乗せたとおりです。

授業で英単語の発音を教えるときには、まず「ローマ字よみ」で読める単語を教えました。例えば、pen, pi-a-no。少し難しくなって te-nnis, flu-te (授業では分節しなかったが、今は分節した方が良かったと反省している。また ten-nis と分節するのが本当かもしれないが、先のようにした方が生徒には分かりやすいであろう)。

ここで「ローマ字読みで発音できたら英語は簡単なんだけど」と生徒に言いながら「残念ながら気をつけなくてはいけないのがあるんだよ」と、cat, A-me-ri-ca, Ca-na-da を取り上げました。これら3語は Cをカキケケコ[k]と説明しながら発音を教えました。

また、good は、[oo]に「ウ」とカタカナをふってやると読めます。他には、例えば meet。これなんかは、やっぱり [ee]は「イー」とカナを振りながら教えました。この時、eの名前の発音が生きてきます。

最後に、change はヘボン式の chi が利用できます。you なんかは [ou] を「ウ」と発音するとカナをふりますが、[o] を抜いて、yu で you の発音というのも無理があるので生徒も予測しにくいと思います。

それでも自分のなかでスペルと発音の関係が整理されていないのは事実で、この際、そのことを整理したいという

のが今回の研究の出発点です。

### 5 3 「分かる」は「分ける」から

そうした中、寺島先生の指導のもと、中学校の教科書に出てくる単語を、次の三種類の単語表を作ってみて、それをもとに、1年生での発音指導の道筋を明らかにしたらという助言を頂いた。それぞれの表を作る過程で感じたことを列挙したい。

- ローマ字読みできる音節を含む単語
- アルファベットの名前読みできる文字を含む単語
- ローマ字読みも名前読みもできない音節を持つ単語

#### 5 3 1 「ローマ字読み」できる音節を含む単語(別表a)

母音や「母音の合わせ文字」(以下の具体例の下線部)が分かれば、ローマ字読みやアルファベットの名前の中の音素が大いに音読に役立つこと感じた。

逆に、母音や「母音の合わせ文字」が英語の発音とスペルの乖離を生み出している最大の障害であるあることも実感した。

ただし、発音しない文字(斜体)や子音のいくつか(phone cardのph[f] classのd[k]など)に注意が必要である。しかしこれは数が限定されているが、これはこれで整理が必要である。

#### 5 3 2 アルファベットの「名前読み」できる文字を含む単語(別表b)

これを作ってみて、実は「名前読み」できる文字は母音だけであると気づいた。従って、表は最初26文字すべてを用意したが、実際に書き出してみると、母音のみであり、しかも[o]はローマ字読みでいけるので、母音[aiue]の4文字だけである。この「名前読み」であるが、このときCVC+eのフォニックスのルールが役立つ。

#### 5 3 3 「ローマ字読」も「名前読み」もできない音節・単語(別表c)

1年生の教科書の単語なのですべてを網羅しているとは言えないが、読みを困難にしている母音や母音の合わせ文字の種類全体がつかめた。母音や「母音の合わせ文字」に含まれる文字のローマ字読み、またはアルファベットの名前の発音がヒントとなっているものも少なくない。その観点で分類すると以下ようになる。

##### 1) 「母音の合わせ文字」の一部のみが発音に関連あるもの

- guitar                   イはiのローマ字読みから
- head                    heはeのローマ字読みから
- each easy leave please team sea speak teach read   イーはeの名前読みから
- beautiful               ユーはuの名前読みから
- people                   イーはeの名前読みからから
- guess                   エはeのローマ字読みからから
- soup you               ウーはuのローマ字読みから
- four fourth           オーはoのローマ字読み/またはfoのローマ字読み

##### 2) 母音の一部の音素と[r]が結合される場合

- here sincerely        イアはeの名前[i:] + rのア
- there where            エアはeのローマ字[e] + rの名前のアでエアとなる
- your yours            ウアはuの名前読み + rから
- chair hair            エアはaの名前[ei] + [i] [ei] 更にrのアでエイからエア

##### 3) rのアのみが利用される場合

- Saturday                アーはrの名前読みから
- her hers                アーはrの名前読みから



bird first third thirty birthday thirteen アーは r の名前読みから

#### 4) 名前読みの一部が利用される場合

many any [ei][e]

以上、中学校1年生の単語を分類して、ますます一年生の英語は大変だなと実感した。というのは英語への輸入語である多音節語はローマ字読みで対応できるが、逆に音節数の少ない英語の「大和言葉」ともいえる語(輸入語ではない古英語から引き継いだ語)は逆に、英語史上の母音の音変化によりローマ字読みできないものが多いからである。

しかも、そうした「大和言葉」だからこそ、日常よく使われる語であり、従って1年生の教科書にも多く出てくる。そうした不規則な語から入らざるを得ない1年生は大変である。教える教師は準備が必要である。

次に1年生に英語を教えていく指導の手順はどうなるであろうか。以下が自分の考えである。

### 5 4 実際に入門期で英語を教えていく指導の手順

#### 5 4 1 子音単独の音をローマ字指導・アルファベット指導を通じてきちんと教える

母音や「母音の合わせ文字」が英語の発音とスペルの乖離を生み出している最大の障害であるが、母音や「母音の合わせ文字」の複雑さに至る前に、子音が単独でどのような音であるかを教えることが大切である。ローマ字や、アルファベットの名前の中の、子音単独の発音が分かれば、単語を読めないことはないからである。逆に言えば、子音単独の音が分からないと音読できないからである。

例えば、by の発音が [bai] となるのは、b は [bi:] の母音を抜いたもの、y は [wai] から [w] を抜いた音で「パイ」と言う発音が納得できるのである。しかし、日本人にとって、特に中学1年生にとって、ひらがなを母音と子音に分けることは易しいことではない。なぜなら、日本語は CV が音の基本単位であり、しかも、ひらがな文字が1対1で対応しているため、中学校の1年生にとって [ba bi bu be bo] [wa wi wu we wo] を、子音 [b, w] と母音に分けることは容易ではない。

子音単独の音素を理解する上で、ローマ字を教え、それからアルファベットを教える順序も妥当である。例えば、ローマ字を学ぶことによって、Y を [wai] と書けるわけで、そのことによって Y は [w] の子音と [ai] の母音からできていることが説明できるのである。

ローマ字を教えるときに、子音と母音からできていることをしっかり教え、アルファベットを教えるときに、その音をローマ字で書き表しながら(WやRのようにローマ字で書き表せないこともあるが)、子音の発音の仕方を教えることが大切である。それが、英語が音読できるようになる確かな一歩である。ローマ字を教え、アルファベットを教えるのはやはり理由があったのである。

#### 5 4 2 日本式ローマ字からヘボン式ローマ字へ

ここで教えるローマ字は、日本式ローマ字からヘボン式ローマ字かであるが、それはやはり「日本式ローマ字からヘボン式ローマ字」が順当であると考えられる。その理由は以下の点にある。

##### 1) 日本式ローマ字の方が単純であること

中学1年生は発達の個人差が大きく、shi chi tsu fu ji を理解した上で覚えるのは大変である。機械的なローマ字表記の方が第一段階として妥当である。

##### 2) 英語独特の発音を指導できる。

例えば、[ta ti tu te to] [ti, tu] で tea, teacher, too の発音、[sa si su se so] の si で sea の発音が導かれる。また [wa wi wu we wo] と表記することによって、with we weather へとつながる利点がある。

こうして日本式ローマ字を習得した上で、ヘボン式ローマ字を教えれば、ヘボン式ローマ字の優れた点やこれを生み出すときの苦労が分かるであろう。

ヘボン式ローマ字の優れた点は、日本語の「ち、つ、し、ふ」などの日本語音声を正確に表記してある点、ch sh などが英語のスペルを理解するのに役立つことである。中学1年生がいきなりヘボン式ローマ字を本当に理解することはたいへん難しいことである。

別表 a 日本式ローマ字読みできるもの(上段 1音節/中段 2音節/下段 3~4音節)

\*斜体は発音しない \*下線はローマ字読み、名前読みできないもの(表3を参照)

	a	i	u	e	o	備考
	a am an and at are an-swer a-bout a-round af-ter-noon A-me-ri-ca a-ni-mal ce-re-al Fe-bru-a-ry u-su-a-ly	in is it its eight co-in eigh-teen in-te-res-ting		eight eighth eigh-teen en-joy eve-ry ve-ry	of old on or often o'clock o-ften	*母音読みできるのは語頭にある文字が多い。
k	k Kan-ga-roo	wa/k-ing		cri-ket bas-ket-ball		[k]の発音は圧倒的にcの文字が多いことが分かる。
	c can cap car cat card car-ton can-not phone-card A-me-ri-ca ca-me-ra Ca-na-da				cold co-in co-la co-mic com-pu-ter	
	q Kan-ga-roo		ques-tion	get	go got	
s	s Sa-tur-day	six sixth sis-ter six-teen sin-cere-ly		seven se-cond Sep-tem-ber se-ven-teen	so-rry soft-ball	サ行に th を入れる点については発音の仕方について留意することとする。
	c city			De-cem-ber		
	th thank	thing				
z	z s th			zero		mu-sic の s に [z] の発音があることに注意
	th that	this				
	j Jap-an Ja-pa-nese Ja-nu-ary		ju-ly ju-ni-or		en-joy	
t	t stand star gui-tar	tyen-tieth bea-u-ti-ful in-te-res-ting		ten ten-nis Sep-tem-ber		日本語の「チ」が [ti] 行に入るので ch をここに挿入した
	ch Ca-na-da	child-ren did din-ner	De-mi stu-dent		dog door Lon-don win-dow	
d	d Ca-na-da	did din-ner	De-mi stu-dent		dog door Lon-don win-dow	
n	n Ca-na-da	eve-ning fi-nish mor-ning Spa-nish ten-nis a-ni-mal ju-nior		pla-net	know no not can-not	eve-ning の第一音節の e も発音しない。
h	h had hard has have hap-py	him his		help hel-lo	home hot	
f	f fast fa-ther break-fast family	fifh fif-teen fi-nish	care-ful peace-ful beau-ti-ful		four fourth before fo-rign for-ty for-teen	fa fi fe fo が日本語にないため新たに行を設定
m	m man March math wo-man a-ni-mal	milk mist co-mic De-mi mi-nute swim-ming fa-mi-ly		mem-ber ca-me-ra	mor-ning	母音の後の r は長母音化する 例 for-teen March car-ly large
y	y	coun-try ear-ly eigh-ty eve-ry fif-ty hap-py sor-ry par-ty quick-ly Syd-ney ve-ry fa-mi-ly Fe-bru-ary		yes		[yi] は [i] に融合している。一方 goodby July の [ai] は y[wai] の一部なのでそれから類推できる。
r	l large last plan class co-la pla-net lan-guage um-brel-la	listen live Li-sa En-glish Au-stra-lia	blue flute	let's wal-let	long lot hel-lo Lon-don o'clock	*語尾の e は発音されない。例 blue flute live [ra] はローマ字読みから [l] は名前読み [el] の [l] から指導できる。 ck は [k] と発音 例 o'clock
	r ca-me-ra	A-pri-l cri-ket A-me-ri-ca fa-vo-rite		child-ren hun-dred dif-fe-rent um-brel-la in-te-res-ting	cross ze-ro	
w	w want watch wal-let	swim with swim-ming win-dow win-ter which		well twelve twelfth went wel-come Wednes-day		ch, tch はチ when の wh は古英語では hwenne, hwanne であった。
	wh what			when where		
b	b bag back bus-band bas-ket-ball	big		bed Ben	Bob	ck で [k] の発音に注意
p	p park Ja-pan par-don par-ty Spa-nish	pic-ture		spend pen pen-cil	spott	

(結論) 母音の合わせ文字、発音しない文字以外は、ローマ字読み、名前読み、名前に含まれる音節の中にヒントがある。

別表 b 名前読みできる単語（1年）

	1音節	2音節	3音節		1音節	2音節	3音節
a[ei]	came change date late plane take table May day play	base-ball  sta-tion A-pril play-er Fri-day Mon-day birth-day		n [en]			
b [bi:]				o[ou]	close those cold old open over no so oh	note-book phone-card al-so	No-ven-ber
c[si:]				p[pi:]			
d [di:]				q[ ]			
e [i:]	these be he she we free meet see sleep tree week Green	eve-ning  bet-ween six-teen fif-teen En-glish ex-cuse be-fore	Ja-pa-nese	r[ ]			
f [ef]				s [es]			
g[ ]				t [ti:]			
h[ ]				u	use sure	ex-cuse mu-sic stu-dent Tues-day	u-su-ally
i [ai]	bike drive find fine five like mine nice nine nice shrine time site write high night right sign child hi ninth Fri-day	some-times		v [vi:]			
j				w			
k [kei]				x [eks]			
l [el]				y [wai]			
m [em]				z [zi:]			

名前読み o はローマ字読みと考  
えられる

子音字 + e の時 e は名前読み  
ee は名前よみ

別表c ローマ字読み・名前読みできない音節を持つ単語

	1音節	2音節	3音節	
a オー	all ball call hall small tall	al-so base-ball walk talk walk-ing	bas-ket-ball	aを「オー」と発音する場合に後に続く子音は-l (l) と-kが多い
a エ	many	a-ny		a[ei]の[e]
ar エア		care-ful		a[ei]の名前とrのrでエア→エアとなる
ar オー	warm			
au オー		Au-gust	Aust-ra-li-a	
ai エイ	rain train			a[ei]+[i]で[e]
air エア	chair hair			a[ei]+[i]で[e]更にrのrでエアからア
u ア	bus but club just lunch much run study up us	hun-dred num-ber hus-band sub-ject sum-mer Sun-day sun-ny un-der	um-brel-la	
u イ	busy	mi-nute		
ui イ		gui-tar		イはiから
ur アー		Thurs-day	Sa-tur-day	アはrから
o ア	does month	bro-ther Mon-day mo-ther se-cond soc-cer wo-man wel-come some-times		
o ウー	do move to who whose			
oo ウー	choose moon noon school too	car-toon	a-fter-noon Kan-ga-roo	
oo ウ	book cook good look	good-bye note-book		ooに続く語はk,dが多い
ow アウ	Brown now wow			
ow ウ	snow			
wo ウー	two			
ou オー	four fourth			o[ou]+uのローマ字読み
ou ウー	soup you			ウはuから
ou ウア	your yours			uから
ou アウ	our ours round	a-bout a-round cloud-y		
ou ア		coun-try		
or アー		home-work	ju-ni-or	アはrから
or オー	short	bord-er		o+rの名前読み
one ワン	one			
ea イー	each easy leave please team sea speak teach read	peace-ful teach-er		イはeから
ea イア	dear near year (e、aの名前 読みに分けられる)			eの名前読み+aのローマ字読み
ea エイ	great			e]+a[e]からア
ea アー		ear-ly		アはaから
ea エ	head	break-fast wea-ther		エはeから
eau ユー			beautiful	エはuから
eo イー		people		イはeから
ue エ	guess			エはeから
er アー	her hers	af-ter an-swer bor-der bro-ther din-ner fa-ther mem-ber mo-ther num-ber play-er sis-ter soc-cer sum-mer teach-er un-der wea-ther win-ter	a-fter-noon com-pu-ter De-cem-ber No-vem-ber Sep-tem-ber yes-ter-day	アはrから
er イア	here		sin-cere-ly	イアはe[i]+rから
er エア	there where			eの名前読みとrの名前のrでアとなる
ey エイ	they			eのローマ字読みとrの名前読みでアとなる
e ア	the			eのローマ字読みとy[wai]の[i]でエイ
ew ユー	new			エはwから
ei イー		fo-reign		イはiから
ie ユー	view			
ie エ	friend			エはeから
ir アー	bird first third thirty	birth-day thir-teen		アはrから
y アイ	by bye dry my why			y[wai]から

表3より分かることは、母音の合わせ文字が英語を発音するときの最大の障害となっていることが分かる。しかし、その合わせ文字に含まれる文字のローマ字読み、またはアルファベットの名称の発音がヒントとなっているものも少なくない。その観点で分類すると以下ようになる。  
そうしてみると、全くスペルと発音が無関係というわけでもない。  
発音を難しくする母音の合わせ文字は、表3なども利用して、基本的な母音の合わせ文字を習得する。そうすれば、あとはローマ字とアルファベットの発音を利用していけば、英語の文字をみて発音できるようになる。

- many a-ny エはaの名前[e]の[e]
- chair hair アはaの名前[e]+[i]で[e]。更にrのrでエアからア
- here sin-cere-ly アはeの名前[i]+rのr
- there where エアはeのローマ字[e]+rの名前のrでアとなる
- gui-tar イはiのローマ字読みから
- head エはeのローマ字読みから
- each easy leave please team sea speak teach read イはeの名前読みから
- beautiful ユはuの名前読みから
- people イはeの名前読みからから
- guess エはeのローマ字読みからから
- soup you ウはuのローマ字読みから
- our fourth オはoのローマ字読み
- your yours アはuの名前読み+rから
- Sa-tur-day アはrの名前読みから
- her hers アはrの名前読みから
- bird first third thirty birth-day thir-teen アはrの名前読みから f

5 4 3 しかし問題は母音や「母音の合わせ文字」である。

そうして子音の音が分かるようになって、やはり母音の発音の仕方が音読への障害となる。例えば、soup は「ソウプ」ではない。ou は「ウー」と発音することを知らずして soup は読めない。このように「母音の合わせ文字」が音読への最大の障害である。それは毎回の授業（授業用のプリント参照）の中で留意してひとつずつ教えていき、一定の語彙数が蓄積された段階で、<別表 c> を与え全体像を使えるようにしてやるのも有効であろう。

5 5 湧いてきた新たな興味

ローマ字とアルファベットの名前の発音が英語の音読に大変役に立つわけだが、ここで逆にこんな考えがわいてきた。「ローマ字やアルファベットの名前は英語の文字がもつ音素から作られたのではないか」。例えば、father, fat, five の [f] を F の名前に取り入れたのではないか。

これまでローマ字やアルファベットの名前の起源について考えたこともなかったが、こう考えれば、ローマ字とアルファベットの名前の発音が英語の音読に大変役に立つのは当然である。（そうしたことは常識なのかもしれませんが。）

以上、自分なりに考えたことであるが、まだ自分としては納得のいくところまで至っていないという気がする。この場で皆さんに意見を聞かせて頂ければ幸いです。

6 母音の「字名よみ」「名前よみ」と「分節法」が意味するもの

さて以上の小川氏のレポートについて若干のコメントを述べ、今回の研究の中間報告としたい。というのは、この共同研究はまだ継続中であり、以下のコメントを受け、小川氏も新しい<表>と指導案を検討中だからである。（実は、以下のコメントは夏の合宿研究会でも述べたことだが、それをここに再録し、同じ問題をかかえている現場教師の参考に供する次第である。）

先ず第1に、氏のレポートで気がついた点を述べておく。氏は上記のレポートで次のように述べている。（下線は寺島による）

この時に、アルファベットの発音も教えるわけだが、まずその発音はアルファベットの名前であるということ  
を説明する。文字に名前があるというのは日本人にはどうも理解しがたいことなので、文字に名前がある  
ことを強調する。

以上の下線部は私には特に興味深かった。というのは、日本語は「文字の名前」と「文字の発音」が一致している  
ので、それをわざわざ意識する必要はないのだが、英語のアルファベットの場合、A という文字を「エイ」という呼び  
名で発音するのは特別な場合で、hat, tap の単語を見れば分かるように、普通は「ア」と発音する。この A を「エイ」  
と発音するのは、英語の基本構造 CVC「子音+母音+子音」の語尾に文字 e が付いた場合など、特例に限られる。

CVC: hat, tap (CVC)+e: (hat)+e, (tap)+e hate, tape

このように、文字 A をアルファベットの字名で発音する場合、それを「字名よみ」または「名前よみ」と私たちは  
名付けているのだが、これは英語の特殊事情であり、イタリア語などラテン系の言語は文字名と発音が極めて近似し  
ているので、英語のような困難性は小さい。そもそも「アルファベット」という呼び名そのものが、ギリシャ文字を  
並び順に「アルファ」「ベータ」...などと呼び、その最初の2文字を取ったにすぎない。

その意味では、英語は極めて難しい言語であり、だからこそ「ディスレクシア」という「病気」も生まれるわけ  
である。ここでは詳論しないが、NHKのETV特集「Dyslexia 英国の実践と日本：読み書きの苦手なをのりこえて」（放映  
2004年8月21日）では、これを「病気」としている。しかし既に述べたように、私は、これは「病気」ではなく、英  
語の持つ「文字と発音の乖離」がもたらす特殊の困難にすぎない、と考えている。もしこれが「病気」なのであれば、  
日本中が病人になってしまうだろう。

また「小学校の英語教育」を声高に叫ぶ人、「世界一簡単な英語」などというキャッチフレーズで英語という「商品」  
を売りまくっているひと、またそれを真に受けて英語学習のみに時間とエネルギーを奪われ、肝心の世界情勢が見え  
なくなっているひとは、この事実を先ず知るべきではないだろうか。というよりも、英語教師こそが上記のような事  
実を知っているべきだと思うのである。外国語を学ぶ出発点としては、英語よりもイタリア語・スペイン語あるいは

朝鮮語のほうが、はるかにふさわしいかも知れないからである。

第2に、上記のことと関連するのだが、気になったのは小川氏の上記レポートにおける次の叙述である(ただし下線は寺島)。というのは、「実際に書き出してみると、母音のみであり、しかも[o]はローマ字読みでいけるので、母音[a i u e]の4文字だけである」と述べているが、[o]の「名前よみ」は「オウ」であり、「ローマ字よみ」する場合の発音は「オ」だから、厳密に言えば、違う発音だからである。

これを作ってみて、実は「名前読み」できる文字は母音だけであると気づいた。従って、表は最初26文字すべてを用意したが、実際に書き出してみると、母音のみであり、しかも[o]はローマ字読みでいけるので、母音[a i u e]の4文字だけである。この「名前読み」であるが、このとき CVC+e のフォニックスのルールが役立つ。

また、せっかく「『名前よみ』するのは母音だけだ」と気づいたのであれば、<別表 a>と同じように、縦軸に子音、横軸に母音の枠をつくり、そこに教科書から抽出した単語を入れていけば、学習者にはもっと見やすい表になったのではないだろうか。ところが、小川氏の<別表 b>は次のように縦軸にアルファベット、横軸に音節数を配している。

	1 音節	2 音節	3 音節
a	came change date late game gate gradelake made make place same hate plane age cake face shade wake waste take table ( day play say May )	ba-by, base-ball, be-came, ex-change, fa-mouse, fa-vore dan-ger na-ture, pa-per, al-ways A-pril, play-er, sta-tion Fri-day Mon-day birth-day	Au-stra-lia fa-vo-rite a-li-an

しかし、これでは、「『名前よみ』するのは母音だけだ」という事実が浮き彫りにならない。これを例えば次のように入れ替えるだけで CVC + e の法則性は浮き彫りになってくる。ここでは1音節語だけを入れてみたのだが、このようにすると、小川氏の上記の表と違って、ローマ字表との対応性も極めて明確になるのではないだろうか。

	あ a: age	い i	う u	え e	お o
か k, c; が g	cake came; game gate grade				
さ s; しゃ sh	same; say; shade				
た t; だ d	take table; date; day				
な n					
は h, f; ば b; ぱ p	hate; face; place plane; play				
ま m	make, made; May				
や y					
ら l, r	late lake; place plane; play				
わ w	wake waste				

ただし、ここで place, plane のような単語を、どの欄に入れるかという問題が起きる。語頭の[pl]という文字に着目すれば pl-ace, pl-ane と考えて「ぱ p 欄」に入れることになるし lace, lane p-lace, p-lane place, plane と考えれば、「ら l 欄」に入れた方が良くことになる。私は、語頭に統一しておけば表を作るときに簡便なので、どちらかと言えば前者の方を取りたいが、他方、学習者が発音の法則性をつかみやすいという点では、後者も捨てがたい。

place, plane

lace, lane

ace

そこで、上記の表では、これらの単語を両方の欄に入れて置いたのだが、このような学習プリントまたはカードを用意して、どちらが教授 = 学習に便利かを試した上で最終的な判断を下すことにしたらどうかと思っている。

さて小川レポートの最後の論点だが、氏は単語 tennis の分節の仕方について次のように述べている。氏が下記で述べていることは、一見ささいなことのように見えるが、今後の単語の発音指導にとって重要な問題を含んでいると思うので、少しコメントをして今回の中間報告を閉じたい。

授業で英単語の発音を教えるときには、まず「ローマ字よみ」で読める単語を教えました。例えば、pen, pi-a-no。少し難しくなって te-nnis, flu-te (授業では分節しなかったが、今は分節した方が良かったと反省している。また ten-nis と分節するのが本当かもしれないが、先のようにした方が生徒には分かりやすいであろう)

上の引用で氏は、「ten-nis と分節するのが本当かもしれないが、te-nnis のようにした方が生徒には分かりやすいであろう」と述べている。確かにローマ字で「て」は [te] だから、「テ・ニス」と読ませるためには、ten-nis よりも、te-nnis のほうが良さそうに見える。しかし、このようにしても問題は残る。

というのは、te-nnis と分節しても、子音字 n が二つ重なってできた [nnis] をどのように読ませるかが問われるからである。「に」はローマ字で [ni] と書くのだから、「て」を [te] と書く要領だと、tennis の分節は te-n-nis となり、ローマ字よみは「テ・ン・ニス」となるはずである。したがって te-nnis のようにしたとしても、必ずしも生徒には分かりやすいとは限らない。

もう一つ、氏のような分節の仕方だと、英語の基本構造 CVC「子音 + 母音 + 子音」を土台にした発音指導ができなくなるという点である。既に述べたように、多音節語は、英語音の基本構造「子音 + 母音 + 子音」同士の組み合わせ、あるいは日本語音の基本構造「子音 + 母音」と英語音の基本構造「子音 + 母音 + 子音」から出来ているに過ぎないからである。たとえば、tennis の場合も次のようになっている。

tennis: ten-nis = CVC + CVC

したがって、ten-nis を「ローマ字よみ」させると、「テン・ニス」のようになるわけである。問題は、「テン・ニス」「テニス」となるのを、どのように説明するかである。しかし、「テン・ニス」を早く発音すれば自然と「テニス」が得られるので、この問題に余り頭を悩ます必要がないとも言えるが、たとえば次のように理論的に説明することも出来るだろう。

すなわち、既に拙著『英語にとって音声とは何か』の第1部第3章「英音法における単語発音の指導」でも既に明らかにしたように、「単語の語尾子音」と単語の語頭子音が衝突したときには、先行する単語の語尾子音が脱落する、という英音法の規則が単語内の分節にも当てはまるのである。

例えばボブ・ディランの有名な歌「風に吹かれて」の1節に次のようなフレーズがあるが、この下線部の発音が脱落するのは上記の理由による。この脱落現象を極端にしたものがフランス語の発音だと言って良いだろう。

How many times can a man turn his head  
Pretending that he just doesn't see?

そして、これと同じ現象が単語の中でも起きるのである。それは次の単語の発音がよく示している。上記の子音脱落は特に破裂音 [t d] の場合に起こりやすいのだが、だからこそ「クリストマス」は「クリスマス」になるわけだし、「ハンドカチーフ」が「ハンカチーフ」になるわけである。

Christmas: Chist-mas = CVC + CVC

handkerchief: hand-ker-chief = CVC + CVC + CVC

この子音の脱落は上記のような破裂音でなくとも同一子音がぶつかるときにもよく起こる。たとえば、tunnel, channel の発音は「トンネル」や「チャンネル」ではなく、英語発音では「タネル」「タヌル」や「チャネル」「チャヌル」に近いものになるのも、同じ理由による。

tunnel: tu(n)-nel	「タネル」「タヌル」
channel: cha(n)-nel	「チャネル」「チャヌル」
tennis: te(n)-nis	「テニス」

以上のような考え方を tennis に適用すれば、小川氏のように [te-nnis] という分節の仕方をしなくても、上記のように容易に「テニス」という発音を得ることができる。しかも、このほうが遙かに応用力が大きい。したがって <別表 a> の改訂版を作るときにぜひ考慮して欲しいと思うのである。

## 7 おわりに

英語入門期の指導といっても、その「入門期」が、高校や大学における英語教育を視野に置いた「中学時代の英語教育」をさすのか、それとも中学2～3年生の英語教育を視野に置いた「中学1年生の英語教育」をさすのか、について私と小川氏の間で必ずしも意見が一致しているわけではない。

しかし小川氏が中学校における現場教師として「入門期の英語教育」を「中学1年生の英語教育」として考えているのであれば、<表1～3>を、「中学1年生の教科書に出てくる単語」だけに限定するのではなく、それを中学3年間全体のものに拡充する必要がある。さもないと、3年間全体を見通した上での「1年生の指導の特殊性」が浮き彫りにならないからである。その意味で、氏の今後の研究に期待するところ大なるものがある。今回の研究報告を「上」とした所以である。

### 参考文献

- 太田垣正義(編, 1992)『先生に聞けない英語の疑問』南雲堂  
大槻 博(1993)『英語の疑問に答える』旺史社  
岸田隆之・早坂 信・奥村直史(2002)『歴史から読み解く英語の謎』教育出版  
児馬 修(1996)『ファンダメンタル英語史』ひつじ書房  
寺島隆吉(2000)『英語にとって音声とは何か』あすなる社/三友社出版  
宮田幸久(1986)『中学英語 Q&A 実用指導事典』教育出版  
遠藤幸子(1992)『英語史で答える英語の不思議』南雲堂フェニックス  
若林俊輔(1990)『英語の素朴な疑問に答える36章』The Japan Times

### 参考サイト

- ローマ字の基礎 <http://www.halcat.com/roomazi/rmzkiso.html>  
ローマ字のいろいろ <http://www.halcat.com/roomazi/iroirol1f.html>  
ローマ字年表 <http://www.halcat.com/roomazi/rnenpyou.html>  
ローマ字資料室 <http://www.halcat.com/roomazi/doc/index.html>  
日本語のローマ字表記方式の系譜 <http://www.halcat.com/roomazi/etc/nhkgen.html>

以上、いずれも「©著作権海津知緒1997, 2003」による。